

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2020 年度
氏名	齋藤 千尋	指導教員 (主査)	杉本 希映

論文題目	対人過敏傾向・自己優先志向がコーピングと抑うつに及ぼす影響についての検討
------	--------------------------------------

本文概要	
<p>【問題と目的】近年、これまでうつ病として一般に認められてきた病態とは異なる特徴をもつ、複数の抑うつ症候群の存在が指摘されており、村中・山川・坂本（2019）は、これらを「新しいタイプの抑うつ症候群」と命名している。新しいタイプの抑うつ症候群の心理・社会的要因のうち、パーソナリティ要因をまとめた研究結果がいくつかある（例えば、辻，2015；吉水・坂部・山崎，2014）。村中・山川・坂本（2015）はこれらを概観し、新しいタイプの抑うつ症候群には対人過敏傾向・自己優先志向という2つのパーソナリティ要因があることを明らかにしている。対人過敏傾向は、「他者からの評価を過度に気にしたり、他者からの評価に過剰に反応したりする傾向」、自己優先志向は「自己の快を他者や集団との関連よりも優先させて追求しようとする傾向」と定義され（村中他，2015）、新しいタイプの抑うつ症候群と関連するパーソナリティを測定する尺度として、対人過敏・自己優先尺度が開発されている（坂本・村中・山川，2017）。新しいタイプの抑うつ症候群と抑うつとの関係については、心理学的ストレスモデルも統合したモデルでの理解が提唱されている（辻，2015）。また、尾関（1993）によれば、コーピングは問題焦点型、回避・逃避型、情動焦点型の3つに分けられる。先行研究を概観すると、問題焦点型コーピングを行ったものは後のストレスや抑うつが低い傾向があるが、回避・逃避型と情動焦点型のコーピングにおいては研究によって結果に差があることが伺える（尾関，1991；辻本・竹谷・小野，2012）。新しいタイプの抑うつ症候群とコーピングの関係はまだ明らかにされていない。そこで本研究では、大学生を対象に、新しいタイプの抑うつ症候群のパーソナリティ要因とされる対人過敏傾向・自己優先志向がどのようなコーピングを介して、抑うつに影響を与えているのかを検討することを目的とする。</p> <p>【方法】調査対象者：大学生 235 名、方法：無記名式質問紙調査、調査内容：①性別、年齢②対人過敏・自己優先尺度（村上他，2017）③コーピング尺度（尾関，1993）④ベック抑うつ尺度（林，1998；林・瀧本，1991）。</p> <p>【結果と考察】対人過敏・自己優先尺度について探索的因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行い、2 因子が抽出された。因子負荷量が.35 未満の項目を削除し、最終的に 22 項目が抽出された。次に各尺度の α 係数を算出し、基本統計量と尺度内及び尺度間の相関係数を算出した。コーピング尺度とベック抑うつ尺度はやや低い α 係数が算出されたが、これまで多くの研究で検討されていることから、本研究ではそのまま使用することとした。また、「対人過敏傾向」に関して、「自己優先志向」「気分の動揺」「抑制感と身体的条件」「自責感」が有意な正の関連を示し、「情動焦点型コーピング」が有意な負の関連を示した。「自己優先志向」に関しては、「気分の動揺」「抑制感と身体的条件」が有意な正の関連を示した。最後に仮説モデルを作成して全体群と臨床に近い群に分けて共分散構造分析を行った結果、「対人過敏傾向」から「情動焦点型コーピング」を媒介して「気分の動揺」「抑制感と身体的条件」「自責感」に負の影響がみられた。また、臨床に近い群では「自己優先得点」から「自責感」に弱い負の影響を示した。新しいタイプの抑うつ症候群は、対人過敏傾向と自己優先志向という2つのパーソナリティ要因を併せ持つことから、対人過敏傾向のパーソナリティ要因が引き起こす抑うつへのアプローチとして、情動焦点型コーピングを用いることが有用であると考えられる。情動焦点型コーピングの積極的な価値を見出すという点や、肯定的な対比をする点は、ストレスである要因の認知を変えるということであり、カウンセリングや、CBT など心理臨床的なアプローチが有用であることが期待できると考えられる。</p>	